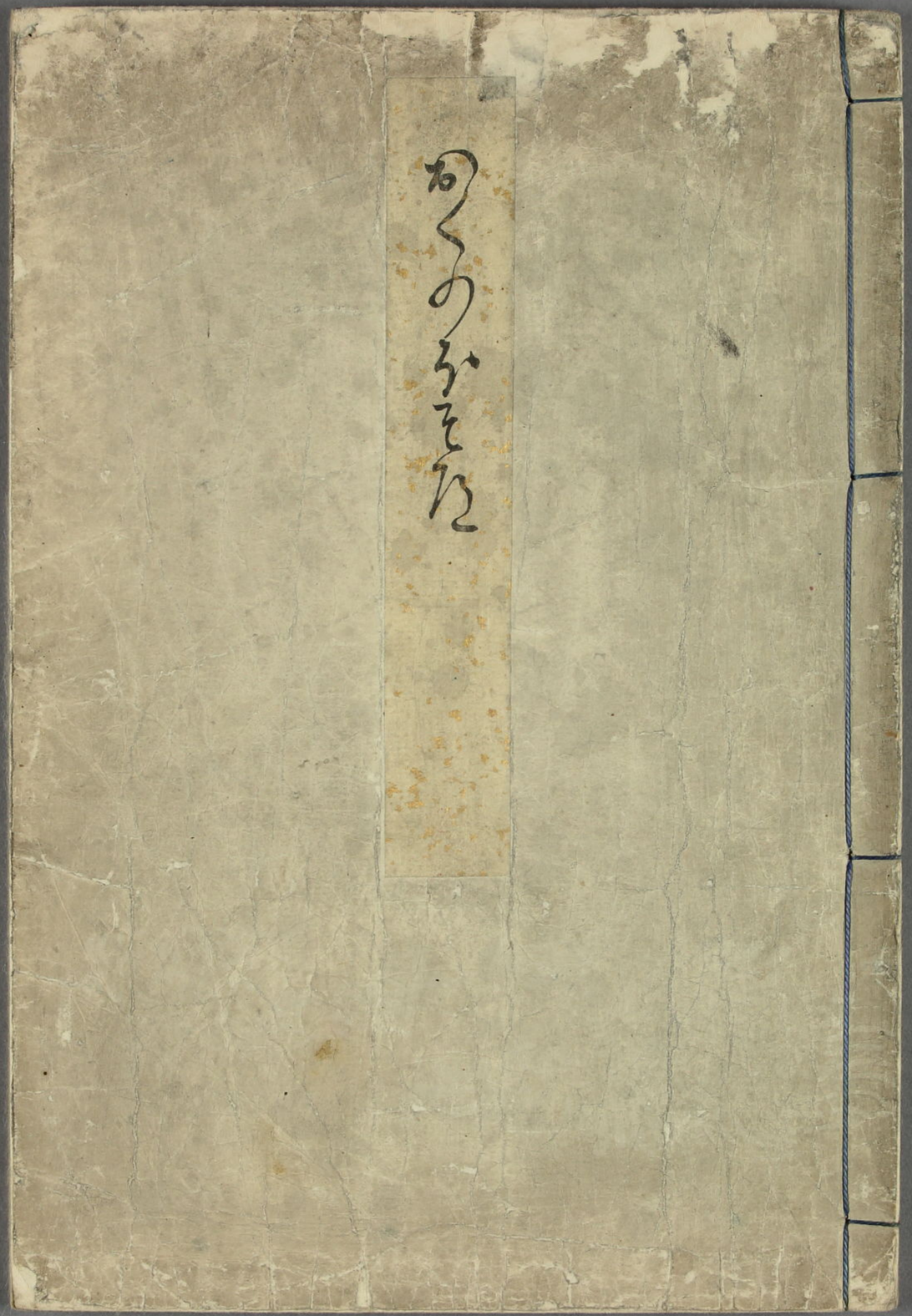


東京　寶晋齋永機首書
浪花　あしの丸家貞英校合

おくのほそ道

晋其角筆

其角堂藏版

帝国図書館蔵書之印

古文後集
史人地名
万物之通
旅史陽也
百代之過
客

蕉雪云の
そゝの通
詞ありて
死の字は
うたの病
つゝしむ
なり

乍ㇾ
老ㇾ
而ㇾ
吟行
也

月日は百代の過客にしてゆきゝもまた
旅人也舟の上に生涯をうかべ馬の口
とらえて老をむかふる者は日々旅にして
旅を栖とすむかしの人も多く旅に死せる
あり予もいつれの年よりか片雲の
風にさそはれて漂泊の思ひやまず
海濱にさすらへ去年の秋江上の破
屋に蜘の古巣を拂ひてやゝ年も

出是の尊生れ給ひて童のいとおさなき
みやうもてあそびものなどにも此世
にいくそばくの魚を葬り給ひし縁起の旨
世まうしつたへも侍る
此日日光山の権
我名を佛五尊
とほるなへに
仙の杖もうちとゞめて休ふみとゞまりぬといふる
佛の御世歟上古ありて下古ある末つ

も食此経とをよみ給ふなるべし
主のおはしますにや心をあてみるべく
世を軽無なるものにて正直偏固のこゝろ
剛毅木訥のにほひをもとゞめ給へるなるべし
賀をもとゞめ給へるなるべし
如月朔日御山をさして出立ぬ
二荒山とみしを空海大師の其基の日光
と改めしを千年の末まで照りみちて
七年御治一天下恩澤八

荒よあれ四季安堵乃栖穏うるも
狂悖多くて筆おかず
あらそうと書集ふ集の日の光
延喜山ひらくる元慶
利すてくらう芭蕉
翁ら河をすう
のうちよりをふくてう新水の労
なりすくこのし松島象潟の眺め
ものそうを恨ひうつ羈旅乃難を

いうもとよりうら波を
おしてをこぎ出て
美登山のうちをも五を宗悟として
北余町山を登て滝有り岩洞の頂より
飛流して百尺千巌の碧潭におちて
屋ふ百をひそめて海のうちよりみまを
うつこの滝よりはるかの和
志いくい所ありやうの和
那須の黒羽とりあえずおもむくなり

雲岸寺
玉机峯
夜鶴石
水分石
亀雲洞
十梅坡
手迹岸
竹林塔
海岸寺
送雪亭
詠茗盌

なを人多くてうの紀さらさて学てん
お林りる至てる山ハもくなるけまて
谷ひをてる松杉蒼く苔むして
可月の天てお宝十余つくる所
杖を引てゆくおろおろのく
のおもむきすしらぬ
上の小菴岩窟石屋を見
禅門の死関の石室を見
所の如

妙雲院の宋元の絵 玉峯どん 山房の午睡 生涯出す
法雲ハ石室よりの馬糞を焚華を薦る

木啄も庵はやぶらず夏木立
と角もあり白玉椿ぬれ作り
散生花ぬり館代よりうて送る
半日休のおもてなしも夜ふけて
ふりを見ての帰るさ

秋を持つ温泉のふもと
都とん温泉ぬ張ぬ物更石の
妻巣いやるうらぬ降深のうし
ものうそうめりもうそうめ死

一生なもも
用しもの
せの人の
るあり宅
の宿もを
やしもる
かつとくい
もまよる

日和田村合
左の方
東谷まで
る松の下
ろく
何さまの沼の
ひろく

里程あり
宮方の
のまち
何さまの沼の
花のころ
しもあり
ろあり
のまち
こもぐ
ふもと

そこの
何さまの
黒塚
鬼こもり
いわや
何とやら
史家宝

とものつこ
のもに
黒塚の岩
吟れもも
恐の黒
土よ埋
けるもし
人の麦
まくそ

和ろのよ陸よ
十度のまろも
けるもつる

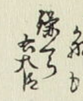
壺碑　市川村多賀城

つるのりまこい古六尺余横三尺ろ
苔もろうもてる文字逃し四維不明
の四里をろんは城神亀元年按察
使鎮守府将軍大野朝臣東人ろ

（貼紙）
取置

取置也天平宝字六年参議東海東
山節度使同将軍恵美朝臣猶修造
而十二月朔日ろて聖詔ろ言の趣
ばものろんまもりよりのろまる
うち物ろく使うろと山前
川院てろ改ろ石小地てろ
木小ろてろれもはろ
代ろて其
のことろろ至て記ろろ

記念と眼あた人の心を開より
脚の一泊おの今の仮寝の旅を
なよそふるそ翁話の当れを
るれよのみ四のむ川伊の石をうの
まのおよいちを過てあまのおて
よあひてこれ墓あまておを
おを重ちもうのまも
ふまはうて
へおのうを



吹てみの日本の
ちもの毎つまて有や
毛てのてれていそ
もこれてしてのこと
の程色をもしてのこと
知てるのもの
に駅ひて明て
ていおて
笑傳 忘れてものの

地宝田村の領
主也 住名となり
七まの領二
面迄
この係我
名又従之
いつとなく
を号 名もまた
日既午ゟ巳一舟
甚雨二而余儀
なく
浙江
東西ゟ

金陵山ハ
秀吉卿創立
伏見の地
山上ニ一の
墓碑アリ

荏苒ハ
年月の
ゆくの
ほど

元祠ハ和泉ノ堺ニアリ
大坂の冬ノ陣ニ康徳公
ヲ伏見ニ移シ南部ニ
ヲ建テ南部ニ
ヲ
ヲ
ヲ

五月雨のふりてもなほ光堂

南部の方へ通るに、いはての関は、いかめしき関所也。
旅人の往来、
此の関より奥の方、
白川の関を越えて、
なほ越後の地をみちのくと
名のみ残して、
おくの細道
曾良

南部の方へ通るに、いはての関は、いかめしき関所也。旅人の往来、此の関より奥の方、白川の関を越えて、なほ越後の地をみちのくと名のみ残して、おくの細道 曾良

のこりなく見尽くさんと、
心はやれども、
病おこりて、
先立つ人を
とどめかねたるに、
旅人
尤傳と
曲翠
江蘭
雲鈴
等、
路縦
前後
して
見送
る。

のこりなく見尽くさんと、心はやれども、病おこりて、先立つ人をとどめかねたるに、旅人尤傳と曲翠江蘭雲鈴等、路縦前後して見送る。

山形領よ立石寺といふ寺
大師の草庵
凡すべてこの
をおがめられ
ありさまいふ
面して山上の堂
山よし松柏
りに岩の
へよう
佳景
ほとんど
ことに
の

もろ川みちの
こゝろを
聞すまゝ
大井川中
流れとう
ゝゝこゝろん集をもとめのうち
鞍おもを放まゝ
酒田のあよ入
中の姫そこゝろを
やいの舟とも
をなみひまふしし白糸の雨を
なくよみて仙堂
ま
五月ふをあつめ
ま

里山を中略て羽黒山とそ
出羽三山を詣て鳥の毛羽をはゝ
貴き事を説るに筆を採ことをえず
月山湯殿を開基して天台止観の
教法を伝て修行修験の
月の如くそこに住して修行修験
説法をそ
御入寂

色又よの
てのそもも
寺の日をふや
為隆の法よ舟
舟物よせて三
あよの老よ舟を
よおおれてのの
およ江陵もり神功皇宮の件墓
とふるを千満珠寺とふよ

永保の
はるばれ
花の上
傍の
つま

功章あるしるいものふなるふる事
あるよるの方おふせて笹を捲も
風景一服の手よこそ南よる所天を
ちを見陰うて江のもも西九
むやうの開放をうまり寄を塩を
る秋田ふるの盛のふ横て
陰も入るおこのふ紀
横一里はのり附松島よりそま
をふり松島ふそ高ふ

右　お稲のまいやう
何某　何處とやらの名

山中やとまいそめし湯の旬

あるときのかたまけのこと

小童こしなよ

臭室そうじもしなよ

み唇めよて

つくゑめてせよ

判印の判をとりみすとりふみ

をとりとりおきて

君公ハ服をとて

ゆかしてゆて

こみ立てゆて

ゆくうち一里ばかり

山家集

ゆかしき倒れ

ゆくまる芝の宿

ゆかしき倒れ

ゆくまる芝の宿

ゆかしき藤井

ゆくまる芝の宿

ゆかしき藤井

ゆくまる芝の宿

大聖寺

こみ立てゆて

ゆくうち一里ばかり

山家集

ゆかしき倒れ

ゆくまる芝の宿

ゆかしき藤井

ゆくまる芝の宿

大聖寺

ゆかしき藤井

ゆくまる芝の宿

大聖寺

ゆかしき藤井

ゆくまる芝の宿

大聖寺

九五十町ニ永平寺を見す道
禅師の門ニ到る卯刻ニ出て
ニ至り山路ニ懸りて漸ニ
申ノ刻ニ及ぶ
福井ハ三里半

等類ハ（達磨ハ祖ニ同ク弟子ニ同ク）

元禄七年甲戌　春龍

元禄十年丁丑　春日
於大阪旅店灯下校了　春龍

東京大学総合図書館蔵書印

梵網経は第四巻より第十巻まで
十年字を仙命より指授慶用正観
経の如く非祖師を
有たるを知て
二百年忌のために
筆記一字
明治十七年冬於真宗専修学校
晋永機

龜戸千向　二冊

其簡堂編輯書目

緑文八百首	四冊	俳諧み草　二冊
萩白五百句	四冊	同　同子法華　坊合集　二冊
彩花摘	四冊	歌題三百首集　近刻　二冊
	二冊	俳談彩雲　一冊

明治十八年二月九日版届
同年三月出版

出版人　晋永機　南多摩郡小梅村字四番地
發兌　松崎羊造　浅草区須賀町十九号地
飲水実都留刀